

保育者養成における評価に関する試み

～ 2023 年度「保育内容 A」の授業におけるピア評価・自己評価に着目して～

小森谷 一郎・金野 麻衣・岩淵 摂子

(保育学科)

I. 問題と目的

本学科独自の教育の一つである「保育内容 A」の授業は 3 名の専任教員がチームティーチングで取り組んでおり、保育学科 2 年生が後期選択必修科目として、生活や行事、遊びを通した総合的な保育内容の考案と指導方法についてカリキュラム・デザインを踏まえて実践的に学ぶこととしている。この授業においては、園行事の実地踏査を行った上で、園行事を踏まえた事前の環境構成や事後の保育活動を構想し、一連の流れとして園行事を生かしたカリキュラム・デザインを構築することをねらいとして設定している。授業の展開方法としては協同学習の手法を取り入れ、グループワーク（以下 GW）によって授業を進めてきた。また、ICT 機器を活用したお便り、指導計画、ドキュメンテーションを作成し、グループごとの模擬保育後にまとめとして振り返りを行うことで、総合的な保育実践力を養おうとするものである。

編成されたカリキュラムをより良いものに評価・改善していくカリキュラム・マネジメントは、「教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくこと」（文部科学省、2017）「教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関す

る調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の PDCA サイクルを確立すること」（文部科学省、2016）であり、PDCA サイクルを取り入れたカリキュラム・マネジメントを考えていくことが重要であるとされている。そこで、本授業では自身の取り組みについて評価し、改善する意識を高めることにつながるよう GW 1 と GW 2 終了後に学生によるピア評価及び自己評価を実施した。しかし、GW 1 のお便りコンテストの学生による投票結果と教員による評価点（10 点満点）を比較してみると、評価の観点に乖離が見られた。教員は、日時・行程・持ち物・服装等の必要事項が記入されているか、及び文章の質等により評価していたが、学生は主に配色や見た目の分かりやすさに視点を置いて評価している傾向が見られた。

そのため、学生が評価基準を理解することがより客観的で適切な評価につながると考え、本稿では GW 終了時に学生が行った評価（ピア評価及び自己評価）に着目し、今後の「保育内容 A」の授業展開のために有意義な示唆を得ることを目的とする。

模擬保育後のピア評価及び自己評価において用いた評価の観点は、模擬保育において保育者役が目指すべき姿を示したものとも言える。模擬保育が終わる度にピア評価を実施することで、評価の観点をより意識してその後の模擬保育に参加したり、注意深く観察した

りするようになり、自己の保育活動においても客観的な視点から省察を行うことができるようになる。結果として学生の保育者としての資質の向上に資するものと考える。

Ⅱ．方法

1．対象

短期大学の保育学科2年生「保育内容A」の履修者40名（女子35名、男子5名）を対象として実施した。

2．調査時期

2023年9月12日～12月19日の後期授業日とした。表1に15回の授業構成を示す。GW1の振り返りは環境構成とお便りのポスター発表日である4回目10月10日に行い、GW2の評価は模擬保育実施日である11月7日、14日、21日に行った。

表1 授業の構成

授業回数	授業内容
① 9/12 ② 9/19 ③ 10/3	【GW1】 動物園に行きたくなる環境構成の考案・保護者向けのお便り作成
④ 10/10	ポスター発表・ピア評価
⑤～⑦ 10/14	【実地踏査】 「八木山動物公園フジサキの杜」 現地の情報収集、子どもの興味・関心を探る
⑧ 10/17 ⑨ 10/24 ⑩ 10/31	【GW2】 動物園見学を生かした遊びの考案、模擬保育の準備
⑪ 11/7 ⑫ 11/14 ⑬ 11/21	模擬保育（6・5・4班）・ピア評価 模擬保育（1・8・2班）・ピア評価 模擬保育（7・3班）・ピア評価 まとめ・自己評価
⑭ 12/12 ⑮ 12/19	【GW3】 動物園見学を生かした遊びをまとめる 指導計画の作成、ドキュメンテーション作成・提出

3．手続き

学生は5名ずつ8グループとした。GW1では、「動物園に行きたくなるような環境を考える」というテーマで、それぞれのグループが考えた環境構成と、保護者向けのお便りをポスターセッション形式で発表・交流した後で、ピア評価を行った。以下に質問項目を示す。

表2 GW1における質問項目

1	自分のグループ以外のポスター発表を見て、良かった点、改善点について考える
2	自分のグループワークへの関わり方も含め、自己評価を行う
3	お便りについての工夫について
4	お便りについての改善点

GW2においては模擬保育を行った後、模擬保育を担当したグループ以外の子ども役及び観察担当の学生がそれぞれ、ピア評価を行った。全てのグループの模擬保育が終了した後、自己評価として個人での振り返り及びグループでの振り返りについて記入させた。ピア評価と、自己評価の個人の振り返り（以後、自己評価）は全く同じ評価の観点・内容で行った。自己評価は、全てのグループの模擬保育とピア評価が終了してから実施した。表3に、ピア評価と自己評価において用いた評価項目を示す。①～⑬の項目について1～5の5段階で評価し、自己評価ではそれぞれの項目について自由記述をしてもらった。模擬保育では、グループの一人がずっとメインの保育者役を担うのではなく、時間内でメインと補助の両方を経験するようにした。T1は模擬保育時のメインの保育者役の評価、T2・T3は補助の保育者役の評価を表す。

表3 模擬保育の評価の観点

項目	評価の観点			
①	T1	態度	保育に対する熱意や意欲が感じられた（身振りや表情）	
②		話し方	声の大きさや発音、話し方が適切で、聞きやすかった	
③		説明	教材や活動内容が適切で、分かりやすかった	
④		対応	子どもたちの興味や関心を引き出そうと工夫していた	
⑤			子どもたちへの声掛けの内容が適切であった	
⑥			子どもたち全員に目を配り、一人一人の進み具合を把握しながら活動を進めていた	
⑦		計画	子どもたちの年齢・月齢に適した活動内容だった	
⑧			時間配分が適切であった	
⑨	T2	態度	保育に対する熱意や意欲が感じられた（身振りや表情）	
⑩		話し方	子どもと視線の位置を合わせている	
⑪		T3	対応	子どもたち全員に目を配り、一人一人の進み具合を把握しながら活動を進めていた
⑫			援助が必要な子どもに対応できている	
⑬	総合		総合評価	

4. 倫理的配慮

振り返りの内容に関しては、研究として活用することを説明し、個人情報等は十分配慮の上、個人が特定されることのないよう取り扱うことを伝えた。記録に関しては、授業における振り返りでもあるため、研究への同意を行わない場合にも記載する必要はある旨学生へ周知した。その上で、本研究における研究への同意について確認し、研究への協力をしない場合においても、評価等へ一切関わらない旨を伝え、対象者より了承を得た。

Ⅲ. 結果と考察

1. GW1後の評価から

GW1では、事前の環境構成とお便り作成

についてのピア評価と自己評価を行ったが、今回は事前の環境構成におけるピア評価と自己評価に注目して、分析を行った。具体的には「どのような点が工夫されているか」「どのような改善点があるか」について行った自由記述でのピア評価について、学生はどのような点を良いと評価しているのか分析をした。

学生からのそれぞれのグループに対する評価数については表4の通りである。

表4 グループごとによる評価数

グループ（班）	1	2	3	4	5	6	7	8
評価数	24	27	24	25	26	21	25	25

グループごとの評価数については、欠席した学生の都合で多少数字のばらつきはあるものの、概ね変わりはない。続いて、得た評価を総合して一つ一つの文章からどのような点を評価しているのかをまとめたものを以下の表5に示す。

表5 学生が評価した内容

評価の内容	人数（人）
クイズ	38
動物の立体・フィギュア	38
動物の足跡	23
鳥などの卵	23
動物の体長	22
動物の速さ	21
テーマを絞る	17
動物園マップ利用	14
感触の表現	14
見る環境の工夫	10
動物等の毛	7
おもちゃ	4
制作コーナー	3
アニメキャラクター	2
動物の分類	2
その他	7

評価数の総計と評価した内容の総計に違いがあるのは、学生の一つの評価に二つ以上の評価内容が含まれることがあるためである。

評価の内容については、245 からなる内容について、その特徴や性質について分析すると「アイディアに関する評価」「構成に関する評価」「視点に関する評価」の三つに分類できることが分かった。

① アイディアに関する評価

「動物の立体・フィギュア」「動物の足跡」「鳥などの卵」「動物の体長」「動物の速さ」「感触の表現」「動物等の毛」「動物の分類」についての評価をアイディアに関する評価に分類した。その特徴としては、「できるだけ本物を提示することや動物を身近に感じさせる工夫をすることで子どもに動物への関心をもたせる」というものである。動物を実際に紙粘土で作成して提示したり、実寸大の足跡や実物の卵、毛を提示したりするといった工夫が多くグループで見られた。また、それらについて「紙粘土で動物の模型を作ること、実際の動物をイメージしやすくなったり、大きさを比較できる」「毛を置くのは感触を楽しめて良い」「大きさや種類豊富に色々な卵を置くことで卵から生まれる動物がいることを知ったり何が生まれるのかを予想したりできる」といった良い評価をする学生が多かった。一方で衛生面に不安を挙げる学生も数名いた。

また、動物の体長や速さを提示する際には、子どもに分かりやすいように長さで示したり、人間と比較できるようにしたりしているところについても評価している学生が多かった。

② 構成に関する評価

「クイズ」「制作コーナー」「おもちゃ」「ア

ニメキャラクター」についての評価を構成に関する評価に分類した。その特徴としては「子どもにとって身近な取り組みや遊びと動物を結びつけることによってより親しみを得ることができるようにする」というものである。「クイズ」や「制作コーナー」「おもちゃ」といったものは子どもにとってとても親しみやすいものであり、普段からよく行っている遊びである。関心をもたせたい動物についてのクイズを提示したり、友達や保育者と一緒に作る・遊ぶことのできる制作コーナー・おもちゃコーナーを設定したりすることで動物に対する関心を高める工夫を行っていた。これらに対しては「制作することで子どもも実際に手を動かす事により、動物への関心を深めたり、動物園まで思い出に残りやすくなったりしてよい」「遊びの中で動物について知ることができる点が良い」といった評価をしていた。特に「クイズ」はほとんどの班で採用されていた。

また、「アニメキャラクター」についても少数であるが評価をしていた。環境の中で親しみやすいキャラクターを設定してより動物を身近に感じさせるのが目的で一つのグループが提示していた。実際の保育の中でもよく用いる手法であり、この点についての評価があったことは学生が保育実習等で取り組んできたからこそその視点であると言える。

③ 視点に関する評価

「テーマを絞る」「動物園マップ利用」「見る環境の工夫」についての評価を視点に関する評価に分類した。この分類については内容的に異なる部分が多いので一つずつ述べていく。

「テーマを絞る」という評価については、ほとんどのグループが多く動物を取り上げて環境を整えていたのに対して、一つのグ

ループは動物を一つに絞って、その動物についての内容を深めるといった視点で環境を整えていた。この視点に対して多くの学生から「一つに絞ることで詳しく理解できるようになる」「より親しみがもてるようになる」などといった評価をしていた。一方で、少数ではあるが「ほかの動物についても学べるコーナーがあればよい」「いろんな動物につなげることができたら、より動物園が楽しみになるだろう」と評価していた学生もいた。

「動物園マップ利用」については、子どもが実際に行く動物園のマップを利用して、当日のイメージを膨らませることを目的にして作成した環境ある。この環境に対しては「動物だけではなく動物園に行くことへの関心・意欲やイメージを引き立てる工夫していた」「動物園にいる動物の位置関係の場所が分かるところが良かった」「初めての場所が苦手な子どもにも良い援助だと思った」などといった評価をしていた。

最後の「見る環境の工夫」の評価についてであるが、これについては、ほかの工夫とは視点が異なる。これまでの工夫が動物や動物園に関心をもたせるためのものであったのに対して、「見る環境の工夫」とは、この環境を見る子どもがより見やすいように、また、より取り組みやすいように環境構成をすることで「子どもの居場所」に関わる評価である。具体的には「子どもがじっくり見ることができるよう椅子を用意する」「子どもがゆっくりと制作できるようなコーナーを整える」といったものである。これらに対して学生からは「座ることができるよう椅子を設置することで飽きずに疲れず楽しむことができる」「子どもたちが落ち着いた環境で学べるようしている点がとても良い」などといった評価をしていた。

この評価については、保育者が子どもがど

のように環境に関わろうとするかといった実際の保育を想像する力が求められる。この点において、学生のこれまでの経験が生かされる評価になると言える。

2. GW2後のピア評価と自己評価から

表6はピア評価のグループごとの平均と評価項目ごとの平均を表したものの、表7は自己評価のグループごとの平均と評価項目ごとの平均を表にしたものである。

表6 模擬保育後のピア評価

group	1	2	3	4	5	6	7	8	平均
①	4.39	4.11	4.25	3.97	4.57	3.89	4.53	4.75	4.31
②	4.39	4.04	4.25	4.28	4.54	4.04	4.67	4.71	4.36
③	4.41	4.15	4.16	4.03	4.29	4.04	4.70	4.68	4.31
④	4.33	4.15	4.25	4.14	4.36	3.93	4.70	4.57	4.30
⑤	4.11	4.04	4.06	3.93	4.14	3.75	4.67	4.61	4.16
⑥	4.14	4.11	4.13	4.07	4.04	3.79	4.53	4.43	4.15
⑦	4.32	4.30	4.31	4.31	4.32	4.36	4.63	4.64	4.40
⑧	4.50	4.19	4.13	4.24	4.57	3.75	4.67	4.54	4.32
⑨	4.39	4.26	4.22	4.07	4.36	3.89	4.63	4.68	4.31
⑩	4.18	4.22	4.16	4.03	4.00	3.89	4.53	4.50	4.19
⑪	4.21	4.07	4.25	4.03	4.11	3.86	4.63	4.43	4.20
⑫	4.14	4.00	4.16	4.17	4.25	3.68	4.50	4.50	4.18
⑬	4.30	4.10	4.16	4.00	4.36	3.57	4.56	4.67	4.21
平均	4.29	4.13	4.19	4.10	4.30	3.88	4.61	4.59	

表7 模擬保育後の自己評価

group	1	2	3	4	5	6	7	8	平均
①	3.50	3.40	3.50	3.00	4.50	4.00	3.80	4.50	3.78
②	4.00	3.50	3.50	3.33	4.50	4.00	3.40	4.75	3.87
③	4.50	3.60	3.50	4.00	4.75	4.25	4.20	5.00	4.23
④	4.00	3.00	3.50	3.33	4.50	4.75	3.80	4.75	3.95
⑤	3.50	3.00	3.25	3.67	4.75	4.75	3.60	4.00	3.81
⑥	3.50	3.25	3.75	4.33	5.00	4.50	3.80	4.25	4.05
⑦	4.00	3.80	4.00	4.67	4.75	4.40	4.80	5.00	4.43
⑧	4.50	3.75	3.25	5.00	5.00	3.25	3.00	5.00	4.09
⑨	3.50	3.25	3.75	3.33	4.75	4.00	4.00	4.50	3.89
⑩	4.00	3.75	3.25	3.67	4.75	3.75	4.20	4.50	3.98
⑪	4.00	3.75	3.50	4.67	4.50	4.25	4.40	4.25	4.16
⑫	4.00	2.75	3.50	3.33	4.25	4.00	3.40	4.00	3.65
⑬	4.00	3.20	3.25	3.67	4.50	3.80	3.40	4.50	3.79
平均	3.92	3.38	3.50	3.85	4.65	4.13	3.83	4.54	

(1) 評価項目（評価の観点）から

表6と表7の評価項目（①～⑬）ごとの平

均を見てみると、⑦の「子どもたちの年齢・月齢に適した活動内容だった」がピア評価では4.40、自己評価では4.43と、どちらの評価でも最も高い値である。模擬保育の対象年齢は2班と3班が4歳児、それ以外は5歳児であった。対象年齢はGW1の開始時に決めており、対象年齢を念頭において活動内容を考え、実施したのであるから評価が高いのはうなずける結果である。

表6のピア評価では、評価の観点ごとの平均はすべて4点台前半で、全体的にやや甘めの評価であったと言えるだろう。その中で一番低い値は⑥「子どもたち全員に目を配り、一人一人の進み具合を把握しながら活動を進めていた」であった。2年生は前期に教育実習・保育実習を経験しているが、実習の振り返りにおいて全体と一人一人の両方に注意を向けることの難しさを挙げる学生は多い。そのため、この項目が他の項目と比べてやや低めの評価となったと考えられるが、それでも大きな差とは言えない。

(2) 最高値と最低値から

表6と表7の最低値と最高値を見てみると、表6の最低値は3.68、最高値は4.75でありその差は1.07である。表7の最低値は2.75、最高値は5.00で、差は2.25であり、点数の差は自己評価の方が2倍以上大きくなっている。理由としては、学生間では他のグループに低い点をつけにくい傾向があることが考えられる。また、模擬保育を開始する前に評価の観点について詳しく説明していなかったことから、ピア評価では学生が評価すること自体に慣れておらず甘めの評価となったことと、自己評価は全てのグループの模擬保育とピア評価が終了してから評価を行ったため、ある程度評価に慣れてきたことが考えられる。

(3) グループごとの評価の順位から

ピア評価で最も評価が高かったグループは7班、次いで8班、5班であった。

自己評価では、最も評価が高いグループは5班、次いで8班、6班である。興味深いのは、ピア評価で最も評価が高い7班は、自己評価は全体で6番目と低く、自己評価が3番目の6班はピア評価では最下位という結果である。

7班の自己評価は8項目において3点台という厳しい評価であるが、中でも最も低い値は、⑧「時間配分が適切であった」の3.00であった。この項目の7班の自由記述を見てみると、「少し時間が延びてしまった」「準備に時間がかかり、製作の時間が遅れてしまった」とあり、時間配分が予定より遅れてしまったという理由から自己評価が伸びなかったことが窺える。しかし、ピア評価では7班の⑧は4.67と高い値を示していることから、子ども役と観察者は適切な時間配分でなかったとは感じなかったことが分かる。予定通りの時間配分でなくとも、7班は柔軟に対応して模擬保育を進めることができたと言える。

表7において、表6と比べて高い値は太字で示し、その中でも0.5以上高い値を示すものはイタリックで示している。5班と6班では13項目のうち10項目で、ピア評価より自己評価が高い値を示している。

これをピア評価による順位と照らし合わせてみると、6班は自己に甘い評価基準（過大評価）を示し、5班も6班ほどではないがやや甘い評価基準であったことを示していると言えるだろう。

学生が評価の観点をしっかりと理解し、自らを適切に、客観的に評価することができていれば、ピア評価と自己評価は一致した傾向を見せるため、これらの比較から今後の課題が抽出できたと考える。

Ⅳ. 総合考察

本稿では、学生の保育者としての資質向上のために、評価に着目して分析・考察を行った。

環境構成についての評価は「実物提示する」「立体やフィギュアを提示する」といったアイデアに関しての評価が最も多かった。これらの評価は、ある程度、容易に気付くことができる内容である。一方で「クイズ」「制作コーナー」「おもちゃ」「アニメキャラクター」といった構成に関する評価については、発達の過程における子どもの興味・関心への理解や保育実習等での経験が必要となる内容であり、これまでの学生の経験が問われる。

また、「テーマを絞る」「動物園マップ利用」「見る環境の工夫」といった視点に関する評価についても、保育者が普段の保育について理解しておくことや保育の中で子どもの環境への関わりについて理解すること、保育を想像する力が求められる。

つまり、学生のピア評価を通して、学生のこれまでの経験やそれを受けての学びの度合いを推し量ることができる。今後の取り組みとしては、これらのピア評価を踏まえて、学生のこれまでの経験や学びなどにも着目したピア評価を検討していく必要性が示唆された。

GW2のピア評価と自己評価の比較の結果から、学生はピア評価では甘めの評価をつけていたことが分かった。また、一人一人がつけたピア評価の値を見ると、全ての項目が全て同じ点数のものもあり、適切に評価ができなかった場合も含まれると考えられる。ピア評価による順位と自己評価による順位にも相関は見られなかった。今後の課題としては、模擬保育を実施する前に評価の観点についての共通理解を図ること、評価の重要性を認識させることが必要である。

また今回の授業では、学生が行ったピア評価を一人一人にフィードバックする時間を持てなかった。自己を客観的に振り返り、改善し、次の計画に生かしていくためにも、フィードバックの機会を持つことも重要と考える。

Ⅴ. 文献

- 小森谷 一郎・金野麻衣・岩淵 摂子. (2024). 保育内容 A -あそびの工夫と展開- 園行事を生かしたカリキュラム・デザイン. 聖和学園短期大学保育学科. 保育指導法実践研究報告書 Vol.9, 8-22.
- 岩淵 摂子・上村 裕樹・金野麻衣. (2023). 保育者養成における共同学習による授業展開の試みーグループワーム「音によるあそび」をテーマにしてー. 聖和学園短期大学紀要, 60, 101-111.
- 石森 真由子・上村 裕樹・岩淵 摂子. (2020). 協同学習を生かしたカリキュラム・マネジメントの理解を促す授業実践. 聖和学園短期大学紀要, 57, 1-14.
- 文部科学省. (2017). 幼稚園教育要領. フレーベル館. 11.
- 文部科学省. (2016). 幼稚園、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習要領等の改善及び必要な方策等について (答申).
- 木村 富美子. (2006). 学生のピア評価における自己評価と他者評価に関する分析ープレゼンテーション演習における試みー. 創価大学通信教育部会. 通信教育部論集, 9, 157-172.